

主こそ王
(王であるキリスト 2010年11月21日)

「王であるキリスト」の祭日に当たって、祈りの助けとして、詩編の書に照らしてキリストが王であるということについて考えてみましょう。ここで詩編の書に照らしてというのは、実は旧約聖書全体が詩編の書の中で祈りとなるとされているからです。また、福音書がどのようにその詩編の書を補足してくれるかを見てみましょう。

ご存じのように、詩編の書は5巻(第1巻1~41、第2巻42~72、第3巻73~89、第4巻90~106、第5巻107~150)に分けられますが、1巻の第1と第2の詩編は、書物全体の序に当たるもので、そこで詩編の書がどのように読まれるべきか、そこから何が得られるかを教えています。詩編の書はアシュレ(幸せ)という言葉で始まり、同じ言葉が第2の詩編の最後の節にも見られます。そのように、詩編の書の教えを身につける人は幸せを得ることができると記されています。

第1の詩編によれば、幸せな者は常に神の教え(トラー)に対して心を開いています。「神の教え」という言葉がたびたび繰り返されていて、それによって、詩編の書が神の教えを授けるものであることを暗示しています。第1の詩編が神の教えに心を開くように勧めるとすれば、第2の詩編は、詩編の書全体を貫く根本的な教えを伝えてくれます。それはすなわち、神が世界に君臨する宇宙の王であるということです。確かに詩編を読み進むにつれて、ダビデとその後継者が、王である神の代理者として果たす役割は変わっていきますが、神が王であるという宣言は、全体を通して変わることがありません。そうした宣言は、第2の詩編では他の王たちに向けられた諭しとして現れてきます。「すべての王たちの王である神に仕えよう。神を自分の拠り所にする人は幸い」(2・10-12 参照)と。したがって、幸せとはユダの王にではなく神のもとに逃れ、神に信頼し、神に依存して生きることにあります。そうした結論はこの書の終わりの方にも繰り返されます(146・5 参照)。一方、詩編の書の序から明らかなように、神のみ国は歴史において激しい対立に出合います。確かに、神の王国は現に存在しているものとして宣言されますが、対立の中で進んでいきます。そこで終末論的な展望が開かれるのです。すなわち対立が消えた神の王国とは、時が終わり、永遠が始まる「時」のことです。こうした詩編の書は、神の招きへの民の答えとして書かれ、典礼上に神の言葉として残り、全人類に伝えられるようになりました。

1. 幸せな者の姿

第1と第2の詩編以外に、全体にわたって、幸せな人の姿が描かれています。その人は神の教えを喜びとする者である、と言われると、幸せという観念は神を中心にして語られていることが分かります。要するに、幸せな人の生活は全面的に神に向けられ、その心は神の教えに開かれています。ですから、詩編の書は、救いについての教えを汲むことのできる必携の書です。そういう意味で、救われていく度合に応じて幸せな者といえます。このように詩編の書は幸せへの手引きであると言われるだけに「アシュレ」という用語が多く使われています(第1と第2の詩編のほか、32・1-2, 33・12, 34・9, 40・5, 41・2, 65・5, 84・5-6 など)。

第2の詩編は、幸せな者の姿を性格づけようとして神に逃れる(ハサー)という言葉を使っています。これも詩編によく出てくる用語です(2・12, 5・12, 7・2 など)。その意味を考慮に入れるなら、幸せな者とは自分ではなく神に全面的に依存して生きている人のことです。「ハサー」という意味合いに基づく他の言葉も多く使われています。拠り所、要塞、砦、岩など。しかしいちばん大事なものは、信頼(拠り頼む)という言葉でしょう(4・6, 9・11, 13・6 など)。と言うのも、幸せな者は、自分の全存在、自分の未来を全面的に神に委ねているからです。神とのそうした関係は他の大事な用語に意味を与えています。正義(セデク)と義人、心の正しい人、誠実な人、善良な人(サデイック)がそれです。したがって、義人とか心の正しい人とは、道徳的に優れている人というのではなく、神との関係を持っている人という意味です。言い換えると善良な人、心の正しい人、義人は、自分自身の神への根源的な依存を認めて生きている人です。皆罪びとですから、彼らの幸せは結局、神のゆるし(32・1-2)と神の慈しみによる誠実さという賜物に由来しています。一言でいうなら幸せな者とは、神の恵みに生きる人たちです。反対に、悪者は、犯罪人という者ではなく、自分だけを頼みにして生きている人、神を認めず自己の自律性だけに基づいて生活を送る人たちです。

2. 「詩編の書の心」は神が王、神がすべてに君臨しておられる

詩編の書において、幸せ、誠実さ、善良さは神のもとに逃れることのうちにある、と言えるのは、神が王であり、すべてを司っておられるからです。神は王であると肯定することは、詩編の書の核心であり、「詩編の書の心」と呼ばれる93~99までの詩編に見られ、この書全体に浸透しています。その肯定が意味することをお話する前に、なぜある専門家がそうした興味深い解釈をしているかを説明しなければなりません。その理由は、詩編の書全体、強いては詩編の書の第4巻、5巻を、バビロンへの追放によって引き起こされた危機に対する答えとして捉えているからです。それに

ついて考察してみましょう。

バビロンへの追放はもちろん歴史的な出来事です。紀元前597年ユダヤ人は捕虜としてバビロンに連れて行かれ、587年エルサレムは破壊されました。539年にキュロスはバビロンにいたユダヤ人が聖地に戻ることをゆるしました。しかし神学上、追放は大きな危機をはらんでいました。つまり、ユダヤ人にとって追放は、生活全体に意味を与えていた三つのものを失うことでした。神殿、土地、王制度です。あるユダヤ人たちは539年に自国に帰り、515年に神殿は再建されましたが、追放前の状態とは完全に変わってしまいました。つまり、捕囚の60年間、イスラエルは独立を失い、王制度は、歴史から永遠に消えてしまいました。それは考えられないほどの損失でした。ダビデの後継者は神の養子として考えられ(2・7)、王制度は、神学上では地上における神の計画の具現と考えられていました(詩72)。王制度がこの世から消えたということは、選ばれた民にとって非常に深い危機を意味するもので、神について、そして神のもとに生きるということについて、新しい理解が必要でした。そうした空白の中に、深い意味での追放の状態が続いていました。詩編の書の最後の編集者はその危機に取り組み、彼らが詩編に表した最後の姿から、神について、そして神のもとに生きるということについて、新しい理解への方向を指し示したと言えます。その意味で、詩編の書は、追放に続く危機に対応したものです。この背景のもとに「詩編の書の心」について考察してみましょう。

詩編の書の中で、88の詩編はいちばん「暗い」、最も悲痛な嘆きを表す詩編です。しかしそれは、詩編89の中に記されている悲劇の予告にすぎません。というのも、それはダビデの王座の設定、その展開、太陽のようにいつもまでも続くという王座の約束を記してから、王は神から退けられ、拒絶されたことで終わっています(89・37-52)。それはイスラエルにとって前代未聞の出来事でしたが、これからどうなるのでしょうか。「主よ、真実をもってダビデに誓われたあなたの始めからの慈しみはどこに行ってしまったのでしょうか」(89・50)。それは追放に関して、ダビデの王座が消えてしまった結果起こった苦悶と不安に満ちた悲劇的な問いです。それで詩編の書の第3巻が終わります。その背景に照らし合わせると、神の王国を伝える第4巻、そして第5巻はその問いに対する答えとなっています。それに沿って、第4巻の始まりである詩編90は解釈され、それに続いてその解釈を支える詩編93～99の王の詩編は、詩編の書全体の心と言われます。驚いたことに、モーセの作とされる唯一のものは詩編90です。普通は人間のはかなさを描く詩編として解釈されますが、詩編89の終わりの問いかけを考慮するなら、詩編90はそれへの答えが始まったという解釈もできます。比喩的に言うなら、人の生きる意味を自分が宿る家にたとえることができます。ですから、有意義な生活と繋がっていた王制度が消えたということは、自分の家から追い出され、もはや宿る家がなくなったということになります。しかし、モーセに導かれて砂漠をさまよった民のことを考えると、その時期には神殿も、土地も、王制度もありませんでした。それでも神のみ旨に従った民の歩みは最高に有意義なものであり、意味に満ちていました。追放の結果起こった危機について、モーセが自分の言い分を述べたとしたなら、何を語ったのでしょうか。その問いに答えて、詩編作者は詩編90を書き記したと思われます。「主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ」という言葉で詩編が始まります。それが詩編解釈の秘訣を手にするということになります。詩編91の1節は、90の詩編の「宿るところ」という言葉について解説してくれます。「いと高き神のもとに身を寄せて隠れ、全能の神の陰に宿る人よ、主に申し上げよ『わたしの避けどころ、磐、わたしの神、依り頼む方』と」。やはり新しい展望が開かれます。追放で民の歴史が終わったわけではありません。イザヤ40章の民に対する神からの慰めは、詩編90に響き渡っています。歴史における神の御計画は行われ続けます。

そうした御計画は結局どこに由来するかと言えば、それは、詩編92・3に記されている神の慈しみ(ヘセド)なのです。その背景のもとに、93～99の詩編によって詩編の書と聖書全体の心が示されています。すなわち、その総括的な意味での心は神が王であるということにあります。詩編94は王詩編とは言われませんが、王である神の根本的な働きを教えてください。それは、王である神は当然、人と歴史との最高の裁き主ということです。また、注意すべきこととして、神のすべての活動の原動力を、その「ヘセド」(慈しみ)に見いだすとすれば、詩編の書第5巻が始まる詩編107も神の慈しみに対する感謝を表すものとして、詩編89の終わりに出された問いかけへの答えと考えられます。

堂々たる詩編119は特別です。そこには、バビロンから戻ってきて聖地で暮らす信仰者の苦しい体験が描かれています。作者は神の教えを受け入れ、それに忠実に生きるけれども、追放の時期に続く世代の代表者として侮られ、迫害を受けています。それは苦しむ僕の姿を映し出す生活です。彼らは、神の国を否定しそれを滅ぼそうとする状況の中に生きています。それで、すでに指摘したように終末的な展望が開かれるのです。120～134のいわゆる「上京の詩編」には、終末的な展望が描かれています。こうした展望は、神のヘセド(神の慈しみ)に基づく選択に由来することを考えてみましょう。つまり、神は王であり、すべてを司り、すべてに君臨するということは、自分の意志を実行に移す権限を持っておられるということです。必然的に、人間の政治の世界においては独裁者の行動と見なされます。しかし、「人間の家」である宇宙を造り、人間を創造された神は、そのように人間を取り扱おうとはしません。しかし自由を与えられた人間は、聖書の最初の物語から、神のみ旨に逆らっています。つまり神は初めから、真の関係を結ぶために傷つけられるという可能性を選ばれたのです。言い換えると、人間を創造した瞬間から、神の受難が始まりました。それが、神の教えに従っている人の生活に映し出される受難なのです。そういう人々は、詩編の書において幸せな者と言われています。それがみ国の終末的な性格づけとなったのです。つまり、わたしたちの歴史に王である神のみ国

は現存していますが、対立と逆らいの中に進んでいくのです。すべての対立が消えるのは、歴史の旅が終わる終点であり、終末的なものです。

以上、J.Clinton McCann という聖書学者から学んだ詩編の読み方を簡単に紹介しました。わたしは、彼のように自分の見解を証明しようとしたのではなく、その理解を伝えようとしただけです。彼の見解は開かれていて、わたしたちがそれを身につけるなら、詩編の中に前には知られなかった意味を見いすだけではなく、多くの聖書学者の貢献と自分の祈りによって学んでいることが位置づけられる、詩編の書の全体的な姿が与えられるのです。クリントン氏から学んだことのうえにさらに他の関連性のある考察をつけ加えたいと思います。

3. 詩編の書はテヒム(詩歌の書)

詩編の書の中で旧約聖書全体は祈りとなる、とする総括的な解釈について、その見解を簡単に紹介しました。それによれば、詩編の書はトーラー、すなわち「神の教え」で、その根本的な教えは、神が王であるということです。それを示すために、クリントン氏はユダヤ人のバビロンへの追放と、それによる民族の文化上の神学的な危機を浮き彫りにして、その危機に対する答えに目覚めた最後の編集者の悟りを伝えてくれます。その悟りとは、王制度が消えたとしても、イスラエルの民が砂漠をさまよった時のように、導いてくださる神は王であるということです。その見解によれば、歴史的なエピソードである追放の体験が信仰者に受けとめられ、神の霊によって生かされると、詩編の書の中に祈り、感謝、賛美として表されます。さらにそうした見解は、他の見解によっても補足されます。すなわち詩編作者は聖霊に導かれて、人間の存在とそれを支える宇宙の存在、そして歴史に展開していく人間のドラマを深く捉えるようになります。その結果、詩編の書は一種の存在論となったのです。それについて考察してみましょう。

ユダヤ人は思索に傾きやすいギリシア人とは違って、自分たちの歴史を世代から世代へと語り伝えるために物語にして、自分たちがどのように奴隷の状態から神の民という身分に上げられたかを綴りました。彼らの心のうちに神ご自身のヘセド(慈しみ)が注がれていたのも、ただ神の慈しみによって行われた無償の御業を認めることができました。ですからそれを感謝せずにはいられません。無から神の民がつくり出されたという業が認められるなら、心は感謝の心に変えられます。当然、そうしたみ業を行われる方の「偉大さ」に心の眼差しが向けられます。それによっていっそう清い、いっそう自分から離脱した、いっそう自己超越的な心の動きが生まれます。それが神をたたえる賛美なのです。と言うのも、神の民が形づくられること、そして感謝し、賛美する心が生まれること、この両者は神のみ業にほかなりません。このように、神の卓越性に与り、歴史において神に仕える祭司の民がつくられたのです。感謝と賛美を教えられた神の民は、カナンの地に入って、自分たちよりも進んだ文化に出会うことになります。そのようにして少しずつ、創世記が綴られるようになりました。こうして神のご自分の民に対する教えは広がり、深められていきます。すなわち、神はご自分の民を無からつくりだされただけでなく、人間の住まいとされたこの宇宙を、無から造られた主でもあります。こうしてすべての存在の究極的な根拠が知られるようになりました。その真理に目覚めた民は、より豊かに自分の召し出し、つまり、神にささげるべき奉仕、祭司としての奉仕について照らされるようになります。言い換えると、人間の手柄や努力の結果とは関係なく、純粋な賜物である存在は、無条件に受け入れる信仰者の心に感謝、賛美、奉仕という意味を持つようになります。

ギリシアの偉大な思想家であったアリストテレスの思索によれば、存在は根源的にそれを捉える人間の理性なしには考えられません。理性は存在を捉えるという役目を負い、すべての存在は理性によって捉え得るものである、というのがアリストテレスの存在論の根本です。ですがイスラエルの存在論はより深いものです。すべての存在は 理性だけではなく、根源的に人間の心に結び付けられています。つまり、賜物として認められ、受け入れられるすべての存在は、根源的に神への礼拝、すなわち、感謝、賛美、奉仕に結び付けられています。そういう意味ですべての存在を礼拝の対象にすることは、根源的に人間が果たすべき課題であると言えます。要するに、詩編の書の作者は、すべての存在を神へのテヒム(詩歌)に変えるのです。そうした心は当然聖霊につくられ、動かされる心です。そのように、人間と他の被造物との協働の結果、歴史において神の栄光が最高に輝くのです。

そうした見解に多くのことが含蓄されています。確かに存在するものは神から良しとされ、すべての存在物を支える秩序は、神からきわめて良いと言われています。ですが存在するものは、人間を含めて限界だらけで、完全とは言えません。その限界は無数の性質を持っています。大自然に起こる災いのほかに、人間の内に潜んでいる悪の働きの結果生じる、不幸な出来事は多いのです。何よりも人間の自由は不完全ですから、悪を選ぶことができ、さまざまの限界から悩みや嘆きが生じます。人間ドラマの中に、嬉しい、懐かしい、美しい、麗しい、悲しい、辛い、痛ましいなどの感情が起こるほか、悲劇や病が生じ、憎しみ、ねたみ、復讐心、怒り、拒絶心、絶望、落胆、意気消沈、嫉妬心、敗北心、退屈などの感情が登場することもあります。それにまた、他の人から搾取され、軽んじられ、軽蔑され、侮られ、辱められ、無きものにされ、憎まれることがあります。存在を丸ごと受け入れた詩編作者はそうした限界を暗黙のうち受け

入れており、そこから救われるよう神に叫びを上げて嘆願することを迫られるのです。と同時に、自分が抱く感情を神に言い表せるなら神の聖性によって変容されるのを知っていて、それらをそのまま神のみ前に持ち出すのです。「バビロンよ、破壊者よ、お前の幼子を捕えて、岩にたたきつけるよう願っている」(137・8-9 参照)というような表現がしばしば出てくるのですが、祈りとなっているそうした復讐心のうちに、癒しと敵へのゆるしと愛の種がまかれています。存在するものとそれに伴う限界を全面的に受け入れ、それを賛美に変える心がいわば賛美のマジックを体験します。つまり、そうした心は、あらゆる限界のうちに神の栄光を輝かせるのです。したがって信仰者は、いかなる窮地に陥っても、いかなる罪からも、聖霊によって賛美の歌を引き出すことができます。詩編の書の中の3分の1以上は嘆きの詩編です。それがいくら激しい、悲痛なものであっても、嘆きは必ず賛美と結びつけられています。神は苦しみのどん底に陥れられたイスラエルの民の賛美のうちに、ご自分の王座を定められました(22・4 参照)。やはり詩編の書の存在論は、実存的な性質を帯びています。それを生きる人は、総括的な神の君臨に参与するのです。

詩編の書の二つの側面からなる読み方を簡単に紹介しました。聖書の解釈的な側面と存在論的な側面です。両者は補い合っています。両者がわたしたちのうちに統合されて、それが詩編の普段の読み方になれば、恵みによって祈りは深まっていくでしょう。

4. キリストは王

この講話のタイトルを「主こそ王」としました。皆さんは気づいていらっしゃるでしょうが、これは二つの意味を持っています。旧約聖書では、神の名として、「ヤーウェ」の代わりに「アドナイ」という名が使われていました。「アドナイ」はギリシア語で「キュリオス」、日本語で「主」となります。新約聖書では、復活後、イエスが「キュリオス」と言われ、ルカやヨハネは好んで「主」という肩書で呼んでいます。それは旧約の「アドナイ」に当たります。当然それが問題になりました。「ナザレのイエスは、旧約でいう神と同じ名前と呼ばれているので、神なのでしょうかと。教会は紀元3世紀、それにははっきりと答えるようになりました。イエスはわたしたちと同じ意味で人間であると同時に、旧約の神、つまり御父と同じ意味で神である、という答えです。それは教会の信仰です。それを考慮するなら、やはり「主こそ王」という言葉には二つの意味があります。旧約では、「アドナイ メレク」は神が王という意味であり、新約ではキリストは王という意味です。そういう意味で「神が王」という教えについて学んだことは、そのまま復活された主イエスに当てはめることができます。

それは別に驚くに当たりません。復活後、イエスはエマオの弟子たちにモーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明しました(ルカ 24・27 参照)。わたしたちは詩編の書の根本的な教えは、主が王であるということだと学びました。そのように、エマオの弟子たちへの主の言葉を信じて、主イエスは王であるという信仰が照らされました。それによってわたしたちは、詩編90の作者が答えることのできなかつた問いに答えるようになりました。ダビデの王制度が政治の世界から消えても、神が王であることに変わりありません。それが詩編89で出された問いへの何らかの答えとなります。しかしそれは、そのことについての神の最後の言葉だったのでしょいか？「真実をもってダビデに誓われた神からの慈しみはどこに行ってしまったのでしょうか」(4 卷 89・50 参照)という問いに対する神からの答えは、ほかになかつたのでしょうか？ この問いはまさに適切です。それに対する神からの答えは、大天使ガブリエルを通してマリアに告げられています。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名づけなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」と(ルカ 1・30-33)。そのように「ダビデの王座を天の続く限り支える」という神からの約束は意外な形で実現されたのです。

ところで、イエスはご復活の前に、自分が王であるという意識を持っておられたのでしょうか。それに対する答えは疑わしいものではありません。旧約聖書によれば、王である神の特権はすべてを裁かれるということです。しかし、それはヨハネ福音書の5章の中にユダヤ人に対して、イエスが答えてこのように述べています。「父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。すべての人が父を敬うように、子を敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない」と(ヨハ 5・22-23)。やはりユダヤ人たちの結論は正しい。つまり、彼らによれば、イエスは神をご自分の父と呼んで、ご自身を神と等しい者とされました(ヨハ 5・18 参照)。それに、ピラトの前のイエスの告白がよく知られています。「わたしの国は、この世に属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない」(ヨハ 18・36)。そこで、「それでは、おまえが王なのか」というピラトの問いに答えて、「その通りです」とお答えになり、「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た」(ヨハ 18・37)と言われました。

このように、詩編の書と新約聖書におけるイエスの王性との関係が明らかになったでしょう。聖アウグスチヌスの「新約聖書は旧約聖書に秘められており、旧約聖書は新約聖書に明白に現れる」という格言のような言葉の意味がそれです。しかし他の側面もあります。つまり、先に述べた詩編の書の存在論的な側面が、ヨハネ福音書に支えられていま

す。というのは、その福音書の序の中に、創世記による創造の物語の再解釈がなされているというものです。つまり創造された万物は神の言葉によって成った(ヨハ 1・3)。ですが一人の人間としてこの世に生れた神の言葉はイエスですから、万物の根拠は神の言葉としてのイエスに見いだされます。一方、人間としてのイエスは、ご自分の存在と共に、すべての存在とそれに伴う限界を全面的に受け入れられました。イエスは詩編を唱えることを通して、神への礼拝、すなわち感謝、賛美、奉仕を学ばれ、十字架と復活の意味を帯びたものとなっていきました。そのように、イエスのみ心は王の心として育てられました。これこそ、イエスの礼拝の存在論的な側面と言えましょう。また、マリアによる聖書的な解釈を学ばれたことは、イエスのみ心に浸透し、太陽のように輝きました。その太陽は永遠に消えることはありません。わたしたちも詩編の書に育てられて、マリアのマニフィカトと山上の説教に新しく目覚め、イエスのみ心にならってその王性に参与するよう呼ばれています。

J.E.Perez Valera S.J.